

Consultants

行動する技術者



田澤 光治

一般社団法人建設コンサルタンツ協会 常任理事

今から20年前、日本の人口はピークを迎え、人口減少と少子高齢化社会の到来、そして地方財政の破綻に見られる地域間格差の拡大が大きな社会問題となりました。

そのようなとき、土木学会誌で『行動する技術者』という連載が始まりました。当時、土木学会会長であった森地茂先生は、のちに出版された『行動する技術者たち—行動と思考の軌跡—』の中で次のように紹介しています。「課題を直視し、その解決策を示して、人々を説得し、地域に貢献してきた人々がいる。まさにCivil Engineer、土木技術者の在り方そのものである。土木技術者にとって、(中略)多様化する市民のニーズ、グローバル化など、複雑化する課題や社会経済情勢を踏まえた努力が不可欠になってきている。すなわち、今こそ、地域に貢献することを本務としてきた土木技術者の原点に立ち返り、それぞれの専門的知識を生かしつつも従来の技術分野を越えて行動することが求められているのである。行動する技術者として取り上げられている専門家が、さまざまな困難に立ち向かい、プロジェクト形成に対する熱意をもって実現したことは示唆にあふれている」。連載の核にあったのは、現場に立ち、当事者と対話し、価値を反転させながら実装までやり切る土木技術者の姿勢です。私にとってこの連載は、「現場に出て耳を傾ける」ことの意味を教えてくれた原点でした。

それから20年。人口減少と少子高齢化は現実となり、災害の頻発化・激甚化、インフラの老朽化、人材不足が折り重なっています。とりわけ地方部では若い世代の流出が突出しており、人口減少のスピードが加速しています。昨年公表した『建設コンサルタントビジョン2025』の検討委員会メンバーの一人であった私は、ビジョン検討の過程で、ある村を取材しました。コンビニが数軒しかなく、大型店へは車で片道20分かかかる地域です。村の担当者は「利便性だけを物差しにすれば厳しい。しかし、ここに住

み続けたい、卒業後に帰ってきたいと思える魅力は、地域資源と“らしさ”を磨くことで高められる。住民のための施策を、住民とともに進める姿勢だけは守り抜きたい」と語りました。豊かな自然、人のやさしさ、特色ある祭りや文化。こうした“らしさ”は移住や定着、関係人口を育む力を秘めています。地域にある多様なリソースを見つめ直し、工夫を凝らして地方創生に取り組む地域を、私たち建設コンサルタントが伴走して支える。ここに、私たちの役割があると考えています。

あらためて「行動する技術者」とは何か。書籍を読み返し、現場での経験と照らし合わせるなかで、私は次のように捉えるようになりました。行動する技術者とは、現場に飛び込み当事者の物差しに寄り添い、専門を越えて価値の組み替えをいとわず、小さく試しながら関係者とともに実装・運用まで伴走する人、地域の“らしさ”を持続可能な仕組みに結び直す人です。核は三点。第一に、現場第一主義と傾聴。机上の最適解に固執せず、多様な当事者の声を起点に構想し、分かりやすい言葉で伝え、合意を紡ぐ力です。第二に、価値の転換。既存の資源や仕組みを見直し、課題を資源へ、制約を可能性へと変えていく視座です。第三に、分野越境と協働の編成。技術、制度、デザイン、ファイナンス、ガバナンスを東ね、構想から実装・運用まで伴走する体制をつくることです。現場の知とデータの知を往還させ、小さく始めて早く回す仮説検証を重ね、学びを共有する姿勢が、信頼を育て当事者を増やすのだと実感しています。

今月号の特集テーマは「対馬が描く、国境の物語と未来への航路」です。海に囲まれたこの国では、国境は多くの離島が担っています。人口減少や高齢化の進展など、離島は他の条件不利地域と比べても一層厳しい状況にあります。豊かな自然や歴史・文化といった島々それぞれの“らしさ”をともに磨き、持続可能な未来をつくる「行動する技術者」が求められます。